

箭山紀行

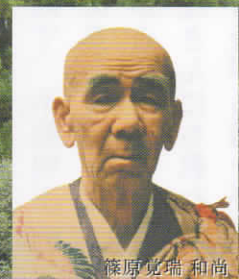
すがる思い、ひとすじ

八面山神護寺といえは西日本一と言われる「釈迦涅槃像」や柴燈護摩法などで、三光地区は勿論、各地からのお参りも多く広く知られた真言宗の寺院ですが、今回はその神護寺の成立にまつわるお話です。

明治二十九年、本耶馬溪町東屋形に生まれた篠原儀市さんは三十一歳の時、弟の弾治さんが重病になりました。“なんとかして弟を救いたい”必死の思いの儀市さんは、佐賀県基山の本福寺の覚忠上人を訪ね、そこで《病氣平癒のお籠り》を続けたのです。参籠をはじめから三十七日目、“八面山二不動ノ滝アリ籠リテ行ヲセヨ”という霊告（おつげ）があり、儀市さんは早速八面山に登り、不動の滝（現在の「修験の滝」に打たれながら一心に祈りました。・・・

滝に打たれ、「祈り」を続けていくなかで、儀市さんは何かに突き動かされるような大きな精神的、いや宗教的な体験をしたのです。その後、真言宗の総本山高野山に登り、大明院実雄大僧正のもとで修行を重ねて得度し、名を「覚瑞」と改めました。

○編集・発行 三光周辺地域振興対策推進会議
「グローバルネット三光」
○連絡先 中津市三光支所内事務局 TEL 43・2050



ところで、八面山の麓にはかつて「猪山神護寺」という真言宗の寺院がありました。江戸時代の初めには既に住む人もなく、寺は荒れ果てていました。（宝永年間に一度再建されますが、再び荒れてしまいました）。



覚瑞和尚は八面山での修行中、無住破却となったこの神護寺のことを聞き、廃寺の跡をたどるのです。和尚はこの「神護寺の復興」と、「濟世利人（この世の弊害を取り除き人々を救い助ける）」という大誓願を立て、難行・苦行に打ち込んで行きました。修行すること五十年、仏縁は熟し、八面山の不動の滝の下流に求めた土地に、新しい「お滝場」そして「本堂」、「太子堂」、「庫裏」、「参籠所」を建立して、真言宗の八面山神護寺を再興することになったのです。さらに誓願であった大東亜戦争の犠牲者及び万霊の供養と恒久の世界平和を祈念して、あの「釈迦涅槃像」の造立を発願したのです。

この涅槃像は、八面山でよく見られる旧耶馬溶岩の自然石に刻まれたもので、仏師は福岡市在住の国広石峯・秀峯父子。昭和四十一年に着工して以来、毎週末に通って彫り続けること足掛け七年。昭和四十七年五月二十八日開眼供養が行われました。

この像は釈迦の入滅の姿を現したもので、弟子たちに見守られながら入滅する釈迦の優しい姿が、力強く美しく彫り上げられています。像の長さは七、八八寸もあり一石の涅槃像としては西日本一とされています。

覚瑞和尚が「なやみ苦しきをもつ人をお救いしたい」という誓願（思い）で、この八面山神護寺を開くと、この地域を中心にお参りする人の数が増え始めました。中には日本でお参りするところがなかった在日の外国人、重い病にかかった人たち、またお金は無いがお米だけを持参してお籠りする多くの人たちの姿が見られるようになりました。いろいろなことに見放され、最後に何かに縋る気持ち、このお籠り堂は『すがり堂』ともよばれてます。お滝に打たれながら祈り、お不動さん（不動明王）にすがり願いをかける人たちが、お参りしました。覚瑞和尚は、お参りに来る人は誰も拒まず受け入れました。



ひたすらお参り



第二代 照瑞和尚

覚瑞和尚の後を継いだ第二代照瑞和尚は、「お参りする人たちみんなをお救いしたい。」と誓願をさらにすすめ、大分県ふるさと砂防事業や三光村河川等整備事業の進捗にも合わせて、寺域の拡大とお堂の整備に努めていきました。そしてなにより、信者さんたちの全面的な奉仕作業によって現在に見るような美しい境内がつけられていったのです。

現住職(第四代)の成規和尚は、「ご縁があつて大阪からここ八面山にまいりました。初代覚瑞和尚が発願した大誓願をいつも心にとめて、不動明王の真言を唱えながら、周りのみなさんにも教わりながら精一杯おつとめをしていきたい」と語りました。



釈迦涅槃像の前に立つ成規和尚

『修験の山に魅せられて』

その屋敷は、八面山の山懐に抱かれるように建っていた。今回登場していただく「金色充仁」さんの屋敷だ。若い頃から郷土史に興味を持っていたという金色さん。その原点は「子どもの時、お年寄りから、八面山は山伏の山と聞いていたからなあ。」と顔をほころばせた。

学校を卒業して、何年か三光を離れ、三十代に帰郷、農協に勤務。四十代の頃、中津市内での郷土史講座に原付バイクで約十年間通った。その後も郷土史や修験への探究心はとどまるところを知らず、求菩提を中心とした山岳修験学会、宇佐歴史民俗資料館高年大学、さらには県ニューライフアカデミアマスターズコースにすすみ、「八面山の史跡」という卒業論文も書いている。一ヶ月程前には、京都で開かれた「日本山岳修験学会聖護院学術大会」にまで出かけたという。資料を前にしてのお話は、すでにライフワークの域を越え、大学の研究者の話聞くようであった。

インタビューを終え、玄関から眺めた八面山は、原口から見えるおだやかな八面山とは違い、修験の場にふさわしく、そそり立つ厳しい姿をしていた。



郷土史や修験への思いを語る金色充仁さん